



ふるさとジオ塾通信第14号

塾生のみなさん、こんにちは。

前回講座、まずは昨年に引き続き野外での「夜の動物ウォッチング」でスタート。昨年はライトが2つしかなく、塾生のみなさんに動物を探す「わくわく感」を味わってもらえなかったことを反省し、今年は10台以上を用意。参加者が少なかったのではほぼ全員にいきわたりました。バスの両側に分かれてライトを点灯。さあ、探索開始！と西様似をスタートしたものの、しばらくの間はほとんど何も現れず思いっきり肩すかしをくらいました。そこで急きょ予定を変更して岡田地区の奥にまで足を伸ばしてみると、いますいます、シカがうじゃうじゃ。結局、目撃できたシカの数ほぼ昨年並みになりました。講座の数日前のシカ調査のときは西様似にたくさんいて、岡田にはあまりいなかったのに…。相手は野生動物、こちらの思い通りになってくれないことを改めて実感しました。野外のあとは室内での座学。今年はシカだけでなく、ヒグマやタヌキ、キツネ、そしてナキウサギなど、様似に棲む様々な野生動物のお話をさせていただきました。でも、今回紹介した以外にも、様似にはもっとたくさんの哺乳類（コウモリ類や海獣類など）がいます。いつか、そんな動物たちのことを知る機会がつかればと思っています。



第9回（12月）講座のご案内



さて、次回の第9回講座は歴史がテーマ。歴史は歴史でも様似ではなく、なんとお隣、浦河町のお話です。日頃から何かと付き合いの深いお隣のまちがどんな歴史をたどってきたのか、そして様似とどんなにかかわりを持ってきたのかを知ること、自分たちのまちのことがもっと見えてくるのではないのでしょうか。講師には浦河町立郷土博物館の主任学芸員：吉田正明さんをお迎えします。講座は塾生以外にも広く開放しますので、知人友人をぜひお誘いの上、お越しください。

【第9回講座 座学「浦河町の歴史：明治・大正時代を中心に」】

1. 日程：平成23年12月14日（水） 19:00～
2. 会場：中央公民館2F小ホール
3. 講師：浦河町立郷土博物館 吉田正明 主任学芸員
4. 申し込み

事前の申し込みは不要です。直接、会場にお越しください。

5. 持ってくるもの

アポイ岳ジオパークガイドブック 筆記用具

北海道のイタチの半分はよそから来たという話

「外来種」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？「もともといなかった地域に、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物」のことで、外来種の侵入は、生物多様性に対する最大の脅威ともいわれています。

さて、北海道にはイタチの仲間（イタチ科動物）が6種います。アメリカミンク、クロテン、テン、イタチ、オコジョ、イイズナですが、実にこの半分が外来種です。アメリカミンクは名前のとおり北米から、テンは本州から毛皮生産目的に持ち込まれたものが野生化したものです。イタチは、ネズミによる林業への害を減らそうと本州から連れてきて森林に放されたものです。これらイタチ科動物は種が違っていても似たような餌や生息環境を求め、それらを巡って激しい競争を繰り広げていると推測されます。外来種が在来種にいったいどんな悪影響を及ぼしているのか、非常に心配です。

ジオコラム ⑪



アポイ岳の頂上で見つけたイタチ科動物の糞。落とし主は在来種？ それとも…。

第8回講座のおさらい

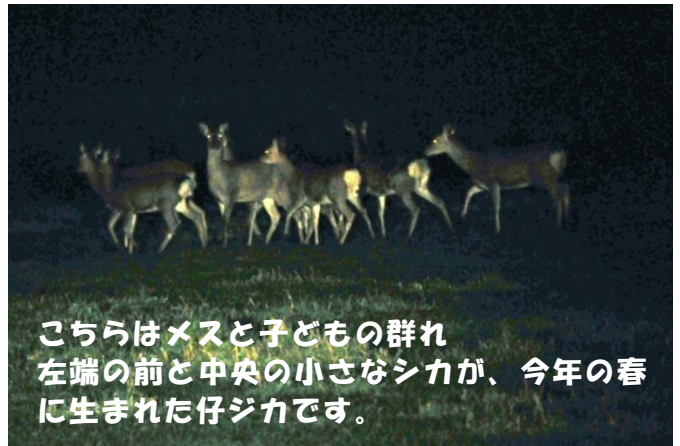
1. 野外「夜の動物ウォッチング」

今回のウォッチングルートは西様似～大海辺～小海辺～岡田。小型バスに乗り、バスの両側から強力なライトで照らしながら動物を探しました。西様似から小海辺までの間は、ときおりシカが見られる程度。この日はシカがあまり牧草地に出ていないことに加え、バスが近づく前に森林内に逃げて姿を隠してしまうシカが多かったことも原因のようでした。たくさんのライトが行きかう異常な光景にシカがかなり警戒したのかも知れません。

こちらを睨みつける立派な角のオスジカ。
繁殖期まただ中のこの時期、オスはかなりの興奮状態にあります。



こちらはメスと子どもの群れ
左端の前と中央の小さなシカが、今年の春に生まれた仔ジカです。



しかし、岡田地区に行くと、バスの両側にシカの群れが次々と現れました。中には30頭ほどのシカからなる群れも。この付近ではあまり捕獲活動が行われていないようで、バスが近づいても逃げることもせず、シカたちは悠然と牧草を食べ続けていました。シカだけでなく、キツネの姿も何度か確認できましたが、見られたのはこの2種のみでした。

2. 座学「様似の陸の生きもの」

1. エゾシカ

平均体重はオス 100kg、メス 70kg。オスの角は毎年生え変わるが、1歳ごとに枝が1本ずつ増えるは迷信。食べ物は100%植物質で、ほぼなんでも食べる。冬の主食はササだが、木の皮や枝も食べてしのぐ。

古い記録によると、開拓前には北海道全域に相当数が生息していたが、何らかの理由により周期的に増減を繰り返していたようだ。ときには急激に減少し、アイヌの人たちが飢餓に苦しんだという記録も残されている。明治の開拓が始まると同時に、シカの乱獲が始まる。それに追い打ちをかけるように2度の豪雪が北海道を襲い、シカは絶滅しかける。そのため、終戦後まで続く長い禁猟期間に入ることになる。その間、シカは着実にその数を増やすとともに分布域を広げ、特に平成に入ると爆発的に増加した。それに伴い甚大な農林業被害や交通障害などの人間との軋轢が生じるとともに、アポイ岳の高山植物の減少など、生態系にまで悪影響を及ぼし始めている。日高地方の最近のシカ増加率はとても高く、日高が北海道で一番シカ密度の高い地域になっている可能性もある。



あの松浦武四郎も蝦夷地でシカを食べた（石狩日誌の挿絵）。



今年見つかった、シカがヒダカソウを食べたと思われる跡。

ここまで増えた理由の一つに、長い間メスシカを保護してきたことが挙げられる。一夫多妻制のシカの場合、メスを捕らないと数は減らない。シカは捕らずに放置すると年間 15～20%の割合で増えるため、4～5 年で 2 倍にもなる。それでは、シカは実際に何頭いるのだろうか？ 報道などで見聞きする「全道に 65 万頭生息」というのは、かなり大まかに推測した数字でしかなく、本当のところは良く解っていない。当然、様似町に何頭いるかはわからない。過去 1 年間に様似町内で捕獲されたシカの数最低でも 1,500 頭。この捕獲数は 10,000 頭の 15%に相当。しかし、調査の結果、去年と比べて今年の方がシカが少なくなったことは確認できなかった。シカの自然増加率（15%）を考えると、計算上は様似町内に 1 万頭以上が生息していてもおかしくないことになる。

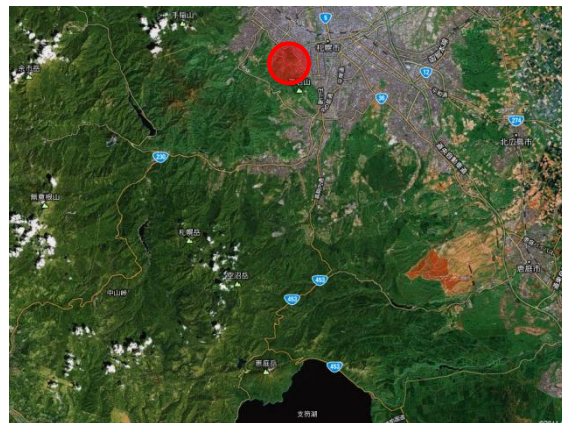
2. ヒグマ

この秋、札幌中心部でのクマ出没が多発している。だが、出没地点の多くは札幌市の西側に広がる広大な森林の縁部分であり、中心部とは言ってもクマが出て全く不思議ではないような環境のところ。クマは肉食と勘違いされることが多いが、実は植物質中心の雑食性。クマの奥歯（臼歯）はまさに臼のように、いろんなものをすりつぶすのに適した形をしている。秋の主食は果実類（ドングリなどの堅果やヤマブドウなどの漿果）だが、今年はこれらが全道的に大凶作。これが札幌市での大量出没の原因とも言われているが、因果関係はよく解っていない。

2 年前、釧路市のイオンショッピングセンターの近くにヒグマが現れたことがあった。この件の場合、市街地に近いというよりも、年末年始というその出没時期に驚かされた。ヒグマは通常 12 月上旬には冬眠に入ると言われてきたが、この事件のように、近年、冬眠に入るのが遅かったり、それどころか冬眠しなかったと疑われるクマの存在が明らかになっている。以前は、秋の餌が足りないとヒグマは冬眠しない（そのために凶暴になる）と言われていたが、どうも逆らしい。冬眠は餌の少ない時期を乗り切るための行動なので、冬でも餌が豊富にあれば眠る必要がなくなる。近年急激に増えたシカがヒグマにとっての冬の餌資源となり、それを食べるようになったために行動が変化したという説もある。

3. タヌキ

タヌキの特徴的な習性のひとつに「ため糞」がある。これは、同じ場所に繰り返し糞をするもので、1 頭のタヌキはいくつもの決まった「ため糞場」を持っているという。しかも、その「ため糞場」は複数のタヌキによって使われるまさに共同トイレの役割を持っている。まるで伝言板のように、「ため糞場」はタヌキ同士のいろんな情報交換に使われていると考えられている。繰り返し糞が積み重ねられると糞の大きな塊ができるので、時々ヒグマの糞と勘違いされることも。タヌキはあまり人目につかないが、意外と市街地近くにいることも多く、様似町内でもいろんな場所で確認されている。



札幌市のヒグマ出没地点の 1 つ（赤丸）。たしかに市街地だが広大な森林の縁。



ヒグマの糞。ヤマブドウがびっしり。消化が良くないクマは、いっぱい食べていっぱい出す。



これがタヌキの「ため糞」。下のほうのものは乾いて白いが、上は新鮮なもの。

4. キツネ

全道どこにでもいるお馴染みの動物。1990年代後半に北海道各地でキツネの数が急激に減ったが、これは疥癬（かいせん）という皮膚病が大流行したためと考えられている。しかし、最近はまだ増えだしたようだ。人にも感染する病気を媒介するという点で、適切な距離を保たなければならない動物の一つ。北海道ではエキノコックスが有名だが、実は海外では狂犬病を媒介することで注意されている。日本では狂犬病は根絶されたが、これは世界的には希なこと。アメリカやヨーロッパの先進国でさえもまだ狂犬病による死者が毎年発生している。もしなんらかの拍子に狂犬病が北海道に入ってきた場合、キツネがそれを広めてしまう可能性がある。観光地などでは、道路に座って、ときには車の前に飛び出して餌をねだるキツネを見かけるが、決して餌をあげてはいけない。人間にとっては病気感染の危険性が高まるだけでなく、キツネも餌を自分で捕る技術を失うことにもなりかねず、結局は両者にとっても良くない結果を招くことになる。



道路わきで餌をねだる「おねだりギツネ」。餌をやることは人間とキツネ両方にとって不幸を招くことに。

5. エゾナキウサギ

モルモットやハムスターくらいの大きさ。現在は天塩山系、大雪山系、夕張山系及び日高山系などに分布が限られる。大昔の氷期に北海道に渡ってきたが、高温に弱いため気候が温暖になってくるに従い、標高の高いところや温度の低い特殊な環境のところでだけ生き残ったと考えられている。ナキウサギが生息できるのは「ガレ場」と呼ばれる、岩石がたくさん積み重なり隙間が豊富な場所にほぼ限られる。ガレ場の岩の間の隙間が、低温環境を作りだし、また隠れ家となるから。ガレ場はまるで海に浮かぶ島のように、森林の中に飛び地状に分布するのが一般的で、その地域のナキウサギはガレ場間で交流しながら群れを維持していると考えられている。様似では、吉田岳やピンネシリ周辺の周辺にナキウサギが生息している。また、幌満峡のジオサイト A3「ゴヨウマツ記念碑」の近くでは、1990年に北海道で最も低い標高（50m）にあるナキウサギの生息地が確認されたが、最近はきちんと調べていないので、今でも生息している
かちょっと心配。

**アポイ岳と吉田岳の間にある
ナキウサギ生息地：ガレ場。→**



ナキウサギ。様似ではなく豊似湖畔にて、南健雄氏撮影。



今後の講座
(予定含む)

第9回講座 12月14日(水)夜 座学 浦河の歴史
第10回講座 1月18日(水)夜 座学 内容未定
第11回講座 2月日(水)夜 座学 内容未定



アポイ[△]ジオパーク

アポイ岳ジオパーク ふるさとジオ塾通信 Vol.14

発行：2011年11月

発行元：〒058-8501 様似郡様似町大通1丁目21
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局
(様似町役場商工観光課)

電話：0146-36-2120 FAX：0146-36-2662

E-mail：apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp

ホームページ：http://www.apoi-geopark.jp/